

学生の災害への取り組み意識の現状と課題

福田洋子

高田短期大学キャリア育成学科

はじめに

1955年に発生した阪神・淡路大震災以降、日本は大きな災害に見舞われてきた。2007年新潟県中越沖地震、2011年東日本大震災、2016年熊本地震、2017年7月九州北部豪雨、2018年7月豪雨、2019年東日本台風、2020年7月豪雨等、毎年のように災害が日本を直撃している。災害は、人々の日常生活を奪い、肉体的にも精神的にも耐えがたい状況を生み出した。このような状況から、災害医療や災害看護は進歩し、それぞれの課題を検討してきた経緯がある。

現在、災害医療は、急性期から慢性期までの絶え間ない医療・福祉の提供を適切に提供できるか（柳川、2019）¹が課題で、厚生労働省は、災害、危機発生時に医療の継続の必要性による医療継続計画（BPC）²の策定を計画している。災害看護の課題は、災害時に状況を想像し、創造する力が重要で、リーダーシップを発揮し、医療の継続を支援できる人材育成が重要であるとしている（太田、2020）³。また災害看護の教育者や研究者の不足、適切な災害看護教育・訓練プログラムの開発が十分になされていないことも課題としている（畑吉、2018）⁴。

一方、災害介護の課題として、松橋らは（2011）⁵は、福祉施設の職員の災害知識や技術不足と災害意識の希薄さを明らかにしている。また、災害マニュアルはあるがマニュアルの活用がされていない状況も報告されている。さらに、介護職員へのアンケートでは、災害や防災に関して不安があり、訓練や日頃の備えの不十分さを感じて、災害介護教育の必要性を認識していたと報告し、災害研修や養成校における災害教育の必要性を説いている。小林ら（2016）⁶は、災害の現地研修に参加した学生の学びとして利用者を思う気持ちの大切さ、地域とのつながりが重要であるとしている。また、訓練や備蓄の工夫の重要性の理解に学びが繋がっていることを報告している。後藤（2017）⁷は、介護福祉養成校の学生に災害時の介護教育プログラムの学習前、学習後調査を行った結果、学習後は、災害に関して体系的に学ぶことを希望する割合が高くなるとともに、災害ボランティアの希望が増えたと、教育の効果を報告している。これらの先行研究から、災害介護教育の重要性が示されているが、具体的な取り組みは遅れている状況にある。そこで、本研究は、まずは今後の災害介護教育の方向性を検討するために、介護福祉士を目指す学生の災害の経験と取り組み状況、災害への意識を明らかにすることを目的とした。

1. 研究目的

介護福祉士を目指す学生の災害の経験と取り組み状況、災害意識などアンケート調査を通して災害に対する現状と課題を明らかにする。また、災害を経験していない日本人学生と災害を経験しているネパール人留学生の災害に対する意識の現状と課題を明らかにし、今後の災害介護教育の方向性を検討する。

2. 研究方法

(1) **調査対象**：三重県在住の介護福祉コース1年生21名（日本人3人、ネパール人留学生18人）、2年生25名（日本人12人、ネパール人留学生12人、中国人留学生1人）計46名、男子7名、女子39名

(2) **調査調期間**：2020年10月～11月

(3) **調査方法**：介護福祉コースの1年生、2年生に主旨を説明し、同意を得て質問紙調査を実施した。紙面は、直接配布、直接回収した。

(4) 調査内容

1) 基本情報

①性別、②年齢、③国籍

2) 被災経験

①被災経験の有無、②災害の種類（豪雨、台風、河川の氾濫、土砂災害、強風や落雷による停電、豪雪、突風、地震、火災）、③災害にあった時期、④その時の気持ち、⑤その時の備え、⑥現在、災害備蓄品として備えているもの（非常食、飲料水、生活用水、生活用品）

3) 防災訓練経験

①これまでに防災訓練を受けたことがあるか、②回数、③どのような防災訓練を受けたか（通報、連絡訓練、初期消火訓練、避難訓練、救出救護訓練、地震訓練、津波対応訓練）、④防災訓練は必要と思うか、⑤その理由

4) 防災教育受講経験

①これまでに防災教育を受けたことがあるか、②いつ受けたか、③どういう時間に受けたか（学活、総合学習、ホームルーム、町内会の訓練、子供会、介護実習）、④どのような内容か（豪雨、台風、河川の氾濫、土砂災害、強風や落雷による停電、豪雪、突風、地震、火災、その他）⑤誰から受けたか（学校の先生、消防士、町内会の人、施設職員、その他）

5) 日常の防災意識

①防災について家族と話し合っているか、②逃げる場所は知っているか、③ハザードマップは知っているか、④どのような災害を心配しているか（豪雨、台風、河川の氾濫、土砂災害、強風や落雷による停電、豪雪、突風、地震、火災、その他）、⑤どのような災害の被害をテレビで知っているか（台風による家屋の倒壊、豪雨による河川の氾濫、豪雪による家屋の倒壊、強風や落雷による停電、突風による被害、地震、土砂災害、火災、その他）

6) 介護職を目指す学習者としての防災意識

①将来介護施設で働くときに防災について知っておくべきことは何だと思うか、②どのような訓練を介護施設ですべきだと思うか、③将来施設職員として介護施設での防災について、どのようなことを意識して行動するべきか、④将来介護施設で働くときに、防災についてどこで教育を受けるべきだと思うか、⑤介護施設での被災状況を知っているか、⑥災害時に介護施設ではどのような災害状況か知っているか、⑦災害時、高齢者や障害者を支援するために何が必要と思うか

(4) **分析方法**：調査項目ごとに単純集計を行った。自由記述の内容分析は、記述内容が単一要素であるようにセンテンスを区切り、それを1件とした。

(5) **倫理的配慮**：調査結果は個人が特定されないように倫理的配慮を行った。

3. 結果

キャリア育成学科介護福祉コースの学生（1年生・2年生）46名から回答が得られ、これを分析対象とした。

1) 基本情報

回答者46名（100%）中、男性が5名（11%）、女性が41名（89%）であり、平均年齢は、2名の無回答者を除き男性が23.8歳、女性が21.4歳であった。国籍別では、ネパール人が30名（65%）平均24歳、日本人が15名（33%）平均20歳、中国人が1名（2%）30歳である。

2) 被災経験

①被災経験の有無

今までに被災経験が「有」と回答した学生は、35名（76%）、「無」と回答した学生は、11名（24%）であった。

表1 被災経験

経験有 35名	日本人 4人	ネパール人 30人	中国人 1人
経験無 11名	日本人 10人	ネパール人 1人	

被災した災害の種類（複数回答）

被災した災害の種類としては、「地震」が32名（84.2%）、「台風」が14名（36.8%）、「豪雨」が8名（21%）、「強風や落雷による停電」が8名（21%）、「土砂災害」が2名（5.2%）、「豪雪」が2名（5.2%）、「火災」1名（2.6%）、無回答8名であった。

被災の種類として、ネパール人留学生は、ネパール地震の経験があり、日本人学生は台風、強風、落雷による停電が多かった（図1）。

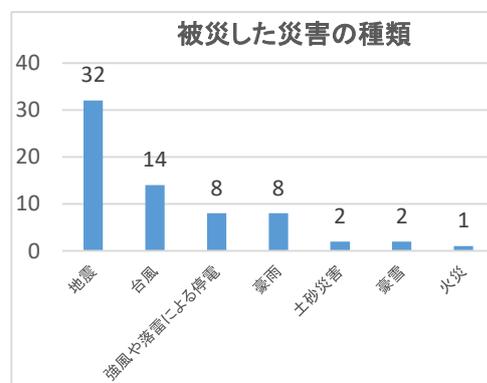


図1 被災した災害の種類と人数

③災害時の時期

回答者46名中、「2006年～2010年」が2名（4.3%）で、「2011年～2015年」が23名（50%）、「2016年～2020年」が4名（8.6%）で、「2011～2015年」と「2016年～2020年」の間に2回経験している人が5名（10.8%）であった。無回答が12名（26%）であった。

④災害時の気持ち（自由記述）

災害時の気持ちとして、多くの学生が、恐怖心や不安をあらわす言葉が記載されていた。特にネパール人留学生は、自国で地震を経験していることから、その時の気持ちを表現していた。「外出が困難であった」との記載もあった。一方、台風の経験がある日本人学生は、「なんとも思わなかった」と記載

していた（表2）。

表2 災害時の気持ち

内容	具体的内容	件数
恐怖	怖くて、慌ててどこに逃げるかわからなかった 2015年の大きな地震で、とても怖かった。今も時々小さな地震がある 怖くて何をするのかわからなかった 地震が来たときとても怖くて、もう死ぬかと思った 怖かったずっと泣いていた 怖かった、家が半分崩れ半分崩れなかった。崩れなかった方において助かった 床が動いてるからびっくりしました。歩くこともできなかったからそのまま座っていた	20件
パニック	地震が来たときとても怖くて、もう死ぬかと思った。 自分がどうすればいいのか どこに行ったらいいのか何も考えることができなかった 何も考えることができなかった。パニックになった	10件
不安	暗くて不安だった 実家の床下まで水がせまってきていて不安だった	5件
安堵	家が半分崩れ半分崩れなかった。崩れなかった方において助かった 家族みんなが安全なところに集まって安全だった	3件
家族の安否	家族は大丈夫かと考えて心配であった 親は大丈夫か等考えた	2件

⑤災害時の備え（複数回答）

被災経験者で、何も準備していなかった学生は15名であった。被災経験が「ある」と回答した日本人学生は、食料・水・懐中電灯・袋が1名、水1名、非常食・ライト1名、頭の上のクッション1名、避難用リュックが1名、「かばんになんか詰めてある」と記載している学生もいた。記載なしが1名であった。

ネパール人留学生で、学校で教えてもらったようにしていたが3名いた。その内の2名がラーメン等非常食、乾燥食品、お菓子、飲み水、ライト、応急用キットと詳しく記載していた。他のネパール人留学生は、食べ物、水、服、救急箱等を個々に記載していた。広い場所、避難場所を決めると記載した学生もいた。多くのネパール人留学生は、急にきたので準備してなかったと記載していた。

⑥現在の災害備蓄品（複数回答）

南海トラフ地震への心配がされている昨今でも、備蓄品を備えていない日本人学生が3名いた。ネパールで地震を経験した学生は、ネパール地震の前に準備物を学んでいた。しかし準備物の必要性は知っているが備蓄品の備えはないと記載している人が10名いた（表3）。無回答は7名であった。

表3 災害備蓄品

備蓄品	備蓄品なし	飲料水	非常食	生活品	生活用水	発電機	ライト	服・毛布
人数	13名 33.3%	21名 53.8%	17名 43.5%	13名 33.3%	3名 7.6%	1名 2.5%	1名 2.5%	1名 2.5%

3) 防災訓練経験

①防災訓練の有無

防災訓練を受けた学生は32名（70%）、受けたことのない学生は12名（26%）、無回答2名（4%）であった。

②防災訓練を受けた回数

ネパール人留学生は、防災訓練を1回も受けてない人や5回受けている人など回数に違いがみられた。日本人学生は、年に1回は防災訓練を受けていることから、回数は多かったが回数にばらつきがみられた（表4）。

表4 防災訓練

回数	0回	1回のみ	2~5回	6~10回	11~15回	16~20回
人数	13名	4名	15名	8名	2名	4名

③どのような防災訓練を受けたか（複数回答）

回答した日本人学生は、地震や火災の避難訓練、消火訓練が多かった。ネパール人留学生が受けていた防災訓練は、地震訓練であった。無回答 11 名を除く 35 名の回答の結果を示した（表 5）。

表5 防災訓練の種類

種類	地震訓練	避難訓練	初期消火訓練	津波訓練	連絡訓練	救出救護訓練	通報
回数	31回	15回	10回	7回	4回	2回	1回

④防災訓練は必要と思うか

質問に「はい」と回答した学生は 41 名（89.1%）で、「いいえ」と回答した学生は 2 名（4.3%）、「無回答」は 3 名（6.5%）であった。

⑤その理由

防火訓練が必要と回答した理由は、「いざというときにどう対応できるかわかる」が 21 名（47%）、「安全のため」が 8 名（17%）、「災害が起きたときに自分の周りの人を護るために必要」が 4 名（9%）、「危険時の準備物がわかる」が 2 名（4%）で、無回答が 10 名（21%）であった。直接的な理由ではないが、ネパール人留学生 1 名（2%）が「日本人の先生に地震の避難訓練を教えてもらったが、外にいた人も家に入ってきて、机やベッドの下に隠れた。しかし、家が倒れてきて多くの人が死んだ」と記載していた。無回答者はネパール人留学生であるが、中には防災訓練を受けていない学生もいた。

4) 防災教育受講経験

①防災教育を受けたことがあるか

防災教育を受けたことがある学生は 28 名（61%）で、受けたことがない学生は 13 名（28%）で、無回答が 5 名（11%）であった。防災教育を受けたことがある学生 28 名の内、日本人学生は 10 名、ネパール人留学生は 17 名で、中国人留学生が 1 名であった。受けたことがない学生 13 名の内、日本人学生が 4 名で、ネパール人留学生が 9 名であった。

②防災教育をいつ受けたか（年齢）

防災教育を受けた年齢は、9 歳が 2 名、10 歳が 3 名、12 歳が 2 名、13 歳が 2 名、15 歳が 2 名、16 歳が 4 名、18 歳が 5 名、20 歳が 1 名、25 歳が 1 名であった。

防災教育を受けた時期の年齢を書いた学生は 25 名（54%）で、その中の 1 名は防災教育を受けたことがないとも記載していた。無回答は 21 名（46%）で、その中の 4 名は防災教育を受けた学生で、12 名は、防災教育を受けたことがない学生であった。

③どういう時間に受けたか（複数回答）

防災教育は、子供の頃に学活、総合学習の時間になどで受けている学生が多かった。その他、職場が 2 名で、無回答が 19 名であった（表 6）。

国別にみると、ネパール人留学生は、学活が10名、総合学習の時間が1名、ホームルームが1名、町内会の訓練が1名、子供会が1名、介護実習が2名、無回答14名であった。

日本人学生は、学活が4名、総合学習の時間が4名、ホームルームが2名、無回答5名であった。中国人留学生は、学活が1名であった（表7）。

表6 防災教育を受けた時間（全体）

時間	学活	総合学習	ホームルーム	町内会の訓練	子供会	介護実習
人数	15名	5名	3名	1名	1名	2名

表7 防災教育を受けた時間（国別）

時間 国別学生数	学活	総合学習	ホームルーム	町内会の訓練	子供会	介護実習
ネパール人	10名	1名	1名	1名	1名	2名
日本人	4名	4名	2名			
中国人	1名					

④どのような内容か（複数回答）

防災教育内容は、地震が24名（52.1%）、火災が6名（13%）、台風が4名（8.6%）、豪雨（2.1%）、河川の氾濫（2.1%）、土砂災害（2.1%）が1名ずつであった。無回答が18名（39.1%）であった（図2）。



図2 防災教育内容

⑤誰から防災教育を受けたか

防災教育を受けた人は、学校の先生が18名（35.2%）、消防士が8名（15.6%）、町内会の人2名（3.9%）、施設職員が2名（3.9%）、その他が2名（3.9%）で2名とも「仕事の研修で受けた」と記載があった。無回答が19名（37.2%）であった。回答者の中で、教育を受けた人を複数あげている回答者が5名いた。

5) 日常の防災意識

①防災について家族（同居者）と話し合っているか

災害準備はしているが、家族と防災について話し合っていない人もいる（表8）。

②逃げる場所は知っているか

災害予防が叫ばれている現在において、逃げる場所を知らないと日本人学生が3名、ネパール人留学生が5名、中国人留学生1名が回答している（表8）。

③ハザードマップは知っているか

災害が多発していることから、ハザードマップについては、メディアなどで説明しているが、知らないと答えている学生26名（56.5%）の方が、知っている学生12名（26%）より多かった。無回答は8

名（17.3%）であった。日本人学生と留学生を比較すると、知らないと答えているのは、日本人学生が4名、ネパール人留学生が21名、中国人留学生が1名であった。知っていると答えているのは、日本人学生が9名、ネパール人留学生が3名であった。無回答は、日本人学生が2名、ネパール人留学生が6名であった（表8）。

表8 日常の防災意識 ①・②・③

N-46

回答	はい	いいえ	無回答
家族・同居者と話し合っているか	24 (52.1%)	15 (32.6%)	7 (15.2%)
逃げる場所は知っているか	29 (63%)	9 (19.5%)	8 (17.3%)
ハザードマップは知っているか	12 (26%)	26 (56.5%)	8 (17.3%)

④どのような災害を心配していますか（複数回答）

日本人学生とネパール人留学生の心配は、地震が35名（77.7%）、台風が20名（44.4%）で、火災が18名（40%）、土砂災害が9名（20%）、強風や落雷による停電が8名（17.7%）、河川の氾濫が6名（13.3%）、豪雨が4名（8.8%）、突風が2名（4.4%）で、無回答が6名（13.3%）であった。その他、日本人学生が1名（2.2%）津波と記載していた。中国人留学生は、地震と強風や落雷による停電を選択していたが、図3には入っていない。土砂災害を選択した学生は、ネパール人留学生のみであった。学生の多くが、地震を心配事として選択していた。日本人学生とネパール人留学生の心配な災害の比較を図3に示した。

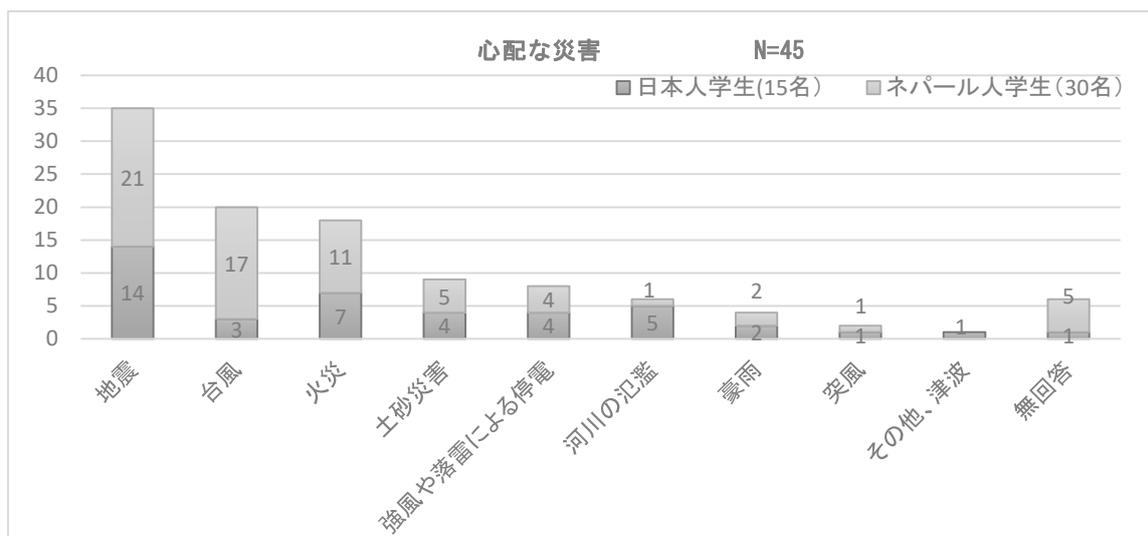


図3 心配な災害の比較

⑤どのような災害被害をテレビで知っているか（複数回答）

テレビで知っている災害被害として、地震が31名（68.8%）で、台風による家屋の倒壊が21名（46.6%）、豪雨による河川の氾濫が16名（35.5%）、強風や落雷による停電14名（31.1%）、火災が12名（26.6%）、土砂災害が11名（24.4%）、突風による被害が8名（17.7%）、豪雪による家屋の倒壊が4名（8.8%）で、無回答が8名（17.7%）であった。

日本人学生とネパール人留学生との比較を、図4に示した。中国人留学生は、地震、台風による家屋の被害、豪雨による河川の氾濫、強風や落雷による停電、火災、土砂災害、突風による被害を知っていると回答していたが図には入っていない。地震、台風、豪雨は、毎日のようにメディアで報道されてい

たことから周知度が高かった（図4）。

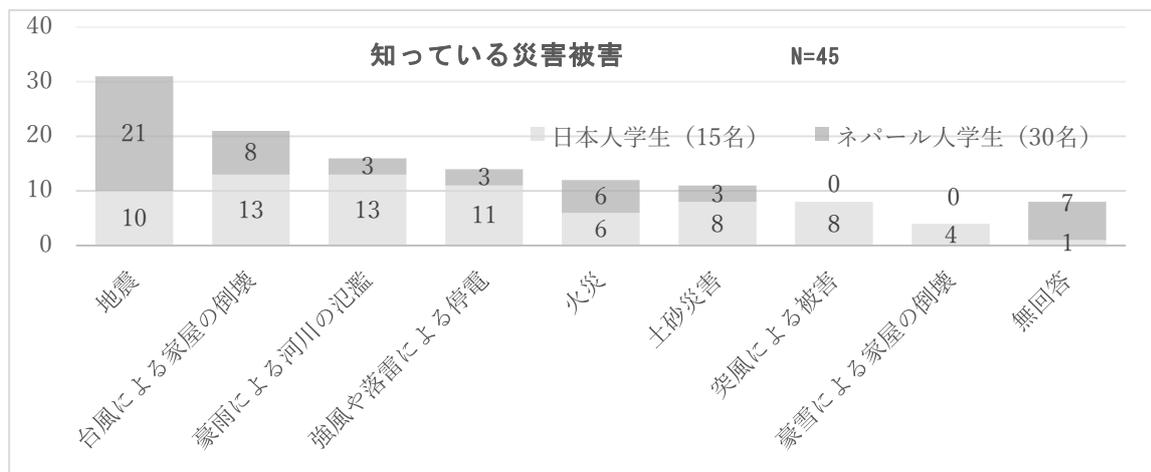


図4 知ってる災害の比較

7) 介護職を目指す学習者としての防災意識

①将来介護施設で働くときに防災について知っておくべきことは何か

防災については、学生自身が防災訓練等で学んできたことから必要と思うことを記載しているようである。施設での防災については災害の経験がないために、一般的な項目であった。無回答が11名であった（表9）。

表9 施設で働くときの防災について知っておくべきことは何か

カテゴリー	内容	件数
安全な場所	・安全なところを知る ・広いところへ行った方が良い ・物が落ちないところへ行く	9件
命を守る方法	・利用者の命を守るためにどうするか ・利用者を安全にどうやってするかを知っておきたい	6件
避難場所	・利用者をどこに避難させたらよいか ・危ないところを知る	5件
避難経路	・安全に逃げる方法 ・避難する方法	4件
地震・災害について	・防災のために地震や災害について知っておくべき ・地震訓練、避難訓練 ・台風について	4件
消火訓練	・初期消火訓練 ・消火器の場所などを知る	2件
防災管理	・すぐに何をしたら良いのか	2件
備蓄	・備えておくもの	2件
安心するための方法	・利用者が安心するためにどう対応するのか	1件

②どのような訓練を介護施設ですべきだと思うか

学生の施設でのイメージが弱いのか、一般的な回答であった。無回答が17名であった（表10）。

表 10 どのような訓練を介護施設ですべきだと思うか

カテゴリー	内容	件数
避難訓練	・地震、津波、大雨、火災などの災害訓練	17件
準備	・必要なものを準備する ・非常食、飲料水、服 ・筆筒の固定	6件
話し合い	・安全に避難させるのか話し合う ・どのような方法が良いか話し合う ・自分も守り、利用者を助けること	5件
消火	・初期消火訓練	1件

③将来施設職員として介護施設での防災について、どのような訓練を意識して行動するべきと思うか。

回答では「準備をする」の件数が多かったが、「命を守る行動」を意識している学生がいた。無回答が22名いたが、留学生が多いことから質問の理解と日本語での記載が難しかったかもしれない(表11)。

表 11 将来施設職員として介護施設での防災について、どのような訓練を意識して行動するべきと思うか

カテゴリー	内容	件数
準備	・すぐに逃げられるよう準備しておく ・必要なものを準備しておく ・棚の上に物をおかない ・食料、水の準備やガスなどチェックしておく ・いつでも逃げられるよう日常で忘れずに頭においておく ・筆筒やガラス等危険な物を片付ける	10件
冷静	・常に落ち着いて、はじめにどういった行動をとればよいのか考える ・落ち着く、冷静に行動する	4件
命を守る	・利用者の命を優先して行動する ・自分も守る	3件
防災教育	・訓練と教育をすることで利用者を護ることができる	3件
避難場所・方法	・どこに逃げるか場所を知っておく ・利用者それぞれどのように避難するか ・利用者と一緒に逃げる	3件
わからない	・まだわからないが、なるべく人を助けたい	1件

④将来、介護施設で働くときに、防災についてどこで教育を受けるべきだと思うか。

回答は、施設が7名で、学校が2名、研修会が1名、警察1名であった。その他、「どこの道を使って避難するか」「消防士」が3名、「はい、必要です。」と10名の記載があった。この記載は、ネパール人留学生で、質問の内容が理解できなかったのではないかと考える。その他に「わかりません」と1名が記載していた。無回答が21名であった。

⑤介護施設での被災の状況を知っていますか。

介護施設での被災状況を知っている人は5名(10.8%)、知らない人は27名(58.6%)、無回答が14名(30.4%)であった(表12)。

表 12 介護施設での被災の状況を知っているか

はい	いいえ	無回答
5名(10.8%)	27名(58.6%)	14名(30.4%)

⑥災害時に介護施設ではどのような災害状況が知っていることを書いてください。

回答では「知らない」が9名いた。記載は、6件(表12)その中でも質問内容と違うことを書いている人が3名いた(表13)。

表 13 災害時に介護施設ではどのような災害状況か知っていること

日本人の回答	留学生の回答
<ul style="list-style-type: none"> ・川が氾濫して孤立した（特別養護老人ホーム） ・水が施設内まで浸かった ・皆で集まって避難している 	<ul style="list-style-type: none"> ・地震の時ドキドキしても頑張って介護をします。 ・自分の座っているところから離れないで、そのまま待ちます ・安全なところまで行く準備をすることが必要です

⑦災害時、高齢者や障害者を支援するために何が重要と思いますか

回答者は 23 名で、高齢者の安全や安全な場所を知っておくこと、訓練と教育が必要である、準備しておくこと、支援者の必要性を上げている。また、落ち着いて行動すること、建物の強化など基本な知識が記載されていた。無回答が 23 名であった（表 14）。

表 14 災害時、高齢者や障害者を支援するために何が重要と思うか

カテゴリー	内容	件数
安全性と場所	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の安全 ・落ち着いた行動 ・順番に避難 ・逃げる場所を知っておく ・声掛け 	5 件
訓練と教育	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が訓練と教育を受けることが必要と思う ・災害が起こる前から訓練が必要である ・高齢者、障害者を支援するために災害のことを知っておくことが必要と思う 	4 件
準備	<ul style="list-style-type: none"> ・食料、水、毛布等くるむもの ・車いす、シルバーカー、福祉用具、トロミ剤 	4 件
支援者	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者は歩くことができないので支援することが必要 ・支援をする人 	3 件
建物強化	<ul style="list-style-type: none"> ・建物を強化する ・スロープ 	2 件
知らない	<ul style="list-style-type: none"> ・知りません 	6 件

4. 考察

4・1 災害に対する学生の現状

被災経験は、ネパールからの留学生が自国で地震を経験していたことで地震の被災経験者が増えている。災害時の時期も、ネパール地震の起こった 2015 年前後の人数が多かった。日本人学生と中国人留学生は、地震の経験はなく、台風や豪雨、強風や落雷による停電の被災経験が多かった。ネパール人留学生は、経験から地震後も余震が続き不安な思いがあり、被災した時の気持ちに「地震の時には、命の危険と恐怖感で涙が止まらなかった。パニックになり何もできなかった」と無力な状況を訴えていた。ゆえに、恐怖感はあるけども落ち着いて行動ができるようになるためにも、防災教育の必要性を強く感じていることが窺えた。一方、日本人学生は、災害教育は必要と回答しているも、大きな災害経験でないことから「なんとも思わなかった」と恐怖感を感じていない現状がある。また、ネパール人留学生は、災害の備えについて、急に来たので何も準備していなかったと記載している学生が多かった。日本人学生は、食料、水、ライトと具体的なものをあげていたが、何も準備していなかったと答えている学生もいた。さらに、災害備蓄品についても、現在何も準備していないと回答している学生が 13 名いたことから、学生の防災に対する思いと現状の備えの差が大きく、自分の身を護ることへの危機感が弱い。

回答した日本人学生は、地震の経験がなく、メディアなどで見聞きしている被災地の様子から、知識はあるが、その知識もいざとなったらどう対応するのかわからないことから、防災訓練は必要と回答し

ている。さらに、逃げる場所を知らないと回答した学生が9名、介護施設の被災状況についても、知らないと答えている学生が28名で、無回答者も多いたことは、将来、介護福祉士として働いた時に、自分自身の安全や利用者の安全確保のための行動がとれるのか疑問である。

ネパール人留学生は、地震の経験があり、アンケート結果にも地震や土砂災害からどのように身を守るか等の思いが強くでており、地震時の恐怖感がイメージとしてあるように窺える。しかし、実際、日本の地理的状況を調べているわけでもなく、知識を高めて危険に備えているわけでもないことが明らかにされた。危機感が強い学生は、災害に備え食料など準備しているが、どのように身を護ったらよいか手段がわからない状況であることが明らかになった。回答した学生たちは、これまでの避難訓練や被災経験から、いざという時のために訓練や教育は必要と回答している。しかし、学生の12名は、防災訓練を受けたことがないネパール人留学生であった。日本に留学しているネパール人留学生が増えていることから、災害教育の必要性が明らかにされた。

日本人学生が受けている防災訓練は、学校で行われていることが多く、地域にある介護施設の被災状況もテレビで見た知識のみで、多くの学生が状況は知らないと回答している。いつ起きるかわからない地震であるがゆえに、一般的な知識のみが先行し危機感は薄い状況が窺える。

4・2 日常の防災意識

災害について家族と話し合っているかの質問では、24名(52%)の人が「はい」と答えている。留学生は、家族が日本にいないことから家族と話し合っていないと答えている人が多い。日本人学生も家族と話し合っていない人が3名いた。また、逃げる場所を知らない(9名)やハザードマップを知らない(26名)と答えている人と無回答者を含めると5割以上の学生の災害意識が脆弱と考える。防災意識を高めるには、災害経験の有無も関係してくると思うが、本人と家族(同居者)との関係性やコミュニケーションの在り方なども関係しているのではないかと考える。学生の防災意識は、家族(同居者)の防災意識にも左右されているのではないかと考える。

メディアでは、地震のたびに津波の状況を伝えているが、心配事に津波と書いてきた人は1名であった。ネパール地震では、津波や火災は起こらなかったためか、地震による津波や火災で命を落とす危険性の訴えはなかった。東日本大震災では、地震による津波とその後の火災で多くの命が奪われた。多くの施設が災害にあっているが、施設の被災状況を知らない割合が回答者の半数にもなる。学生は、テレビで、川が氾濫して孤立した特別養護老人ホームを見た、水が施設内まで浸かっている状況を見た、皆で集まって避難している様子を見た等、メディアを通しての知識として回答している。介護福祉士を目指す学生として、自分で調べるなどの学びはしていないことが窺えた。

時が過ぎれば忘れてしまう災害経験を、常に意識して、命が守れる行動に移せる知識や技術に定着するために、災害ボランティア等の体験学習や学校での災害教育としての学びの必要性があると考えられる。災害時に落ち着いて行動できるために、災害教育で、継続した知識と技術を学べる教育環境が必要である。

おわりに

災害介護教育は、災害時に高齢者や障害者など、支援を必要とする人々の命をどのように守るのか、また、災害後に起きる二次災害の予防と生活支援をどのようにするのが求められる。災害時には災害支援者として介護職が活躍しているが、学生の中から対象者の安全で、安心できる災害支援の知識や技術を身につける必要がある。その為に、災害介護教育の確立が重要となる。

本研究により、学生の災害に対する知識が断片的にすぎないこと、意識が多少あるものの希薄、あるいは具体的な行動に繋がるような意識ではないことが明らかになった。学生たちは、これまでの災害訓練だけでなく、災害教育の必要性を感じていることも明らかとなったが、施設における災害時の対応など、具体的に学べる教育の機会が必要である。ゆえに、学校教育での災害訓練と施設での災害訓練をどのように連携して実施できるか検討していくことが必要である。さらに、今後の災害教育の方向性として、昼間だけでなく、夜間に地震が起きた時に1人でどのような行動をとったらよいのか、支援者をどう確保するのか等、多くのことを学ぶ必要があることも確認できた。以上から、学校での教育と施設での実践を結び付け、双方が学び合える環境づくりを考え、将来的には、災害時に多職種と連携でき、リーダーシップ、フォロアーシップが取れる知識、技術の向上を目指す教育プログラムの検討をしたい。

謝辞：論文作成にあたり、ご指導いただいた鷺尾敦先生に深く感謝の意を表します。

(註)

1. 柳川洋一 (2019)「災害医療の現状と問題点」脳外誌 28 巻 9 号 pp561-566
2. 第 15 回救急・災害医療提供体制等の在り方に関する検討会「救急・災害医療に係る現状に浮いて」令和元年 7 月 18 日
3. 太田晴美 (2020)「組織と医療者の備災一連携・協働を過去の災害から学ぶ」札幌保健科学雑誌第 9 号 1-6
4. 畑吉節夫 (2018)「災害看護実践行動の検討ー災害医療経験を持つ医師の語りからー」神戸常盤大学紀要 11 号 pp45-56
5. 松橋明子、村上照子 (2010) (2011)「高齢者施設における災害対策の実態と災害介護教育に関する意識ーA 県内の特別養護老人ホーム管理者への調査から (第 1 報) (第 2 報)ー日本赤十字秋田看護大学紀要・日本赤十字秋田短期大学紀要 第 15 号・第 16 号
6. 小林聖恵、佐藤千絵 (2016)「介護福祉士養成における災害介護教育の方向性の検討ー防災現地研修に参加した学生の学びからー」帯広大谷短期大学紀要第 53 号 pp57-65
7. 後藤真澄 (2017)「災害時の介護福祉教育の検討ー学習前後の比較からー」中部学院大学・中部学院

(参考文献)

- ・岩村龍子 (2014)「災害対応における看護職が果たす役割・機能と役割・機能を発揮するために必要な能力」岐阜県立看護大学紀要第 14 巻 1 号
- ・栗本一美、丸山純子 (2016)「A 大学看護学生の災害に対する意識と防災対策の実態」新見公立大学紀要第 37 巻 47-52
- ・高橋純一、布川奈津美 (2010)「防災力を高めるための地震防災教育に関する研究ー栃木県内中学校における地震防災学習プログラムの提案ー」小山工業高等専門学校研究紀要第 43 号 163-168
- ・高野晃伸 (2015)「災害介護教育プログラムの構築・開発および有効性の検討 (科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 25380832)」研究
- ・峯本佳世子 (2013)「地域包括支援センターにおける災害時支援の実態：東日本大震災被災地の災害時要援護者対策と災害時対応」同志社政策科学研究 14 巻 2 号 161-174